

寛克彦の神道教育

—その基礎的研究と再評価への試み—

中道豪一

はじめに

神道教育研究を俯瞰した際、近世神道家たちの教育活動を対象とした考察は河野省三や岸本芳雄によって成果が挙げられている。しかし近代以降の教育事例に限って言えば、その説明は現在開拓期にあるとあってよからう。本稿はそうした状況を踏まえ寛克彦（明治五〇昭和三六）という大正から昭和にかけて活躍した法学者（法学博士）に焦点を絞って考察を行った。

寛は明治三〇年東京帝国大学法科大学を卒業後、ドイツに留学しギールケやデルタイに師事。帰国後（明治三六年）に母校で行政法・憲法・法理学・国法学等の講座を担当した人物である。法学研究としては『法理戯論』・『国家之研究』・『大日本帝国憲法の根本義』が有名だが、本稿は『神ながらの道』に見られる独自の神道論と、その展開

たる実践に注目する⁽¹⁾。特に日本体操（皇国運動）は「神ながらの道」を修める体操として国内のみならず国外でも実施された実績があり、方法の詳細も残っていることから神道教育研究上、非常に貴重な事例である。また基盤となっている神道論だが大正天皇妃 貞明皇后への御進講をはじめ、秩父宮雍仁・高松宮宣仁との交流を考えると、巷に溢れた神道論とは内容・影響力共に一線を画す存在と考えられる。

そこで本稿は、寛の神道論の中でも特に重要と考えられる「神ながらの道」の概念を明らかにし、その延長線上に存する日本体操との関係を説明することを第一のねらいとし、寛に関する人物評価等、先行研究の整理と分析を第二のねらいとした。

近年における寛の神道論研究については三瀧信吾・竹田稔らの業績があるが、本稿ではそうした先行業績を踏ま

えながらも、それらと異なる角度から考察を行った。それは「皇学」や「国家神道」という観点ではなく「人の心」という側面から、神ながらの道を探ったことにある。寛の神道論は、古神道・神ながらの道という用語によって展開されるが、これについては寛が「日本我たる普遍我の事実の為に存在する理法」・「生活規範の普遍的理想」と定義を行っていることから、先行研究もそうした語を用いて整理・分析を行っている⁽²⁾。しかしこれらの考察は、当該分野における分析として成果を挙げている一方、寛の説かんとする内容に寄り添い分析を加えるという点において論及の余地を残しているといえる。

では何故神ながらの道を「人の心」という観点から考察する必要があるのか。それはそもそも寛が神ながらの道を「人の心の道」「人の心を練る道」と言い表しているからである⁽³⁾。この視点は寛の神道論を考察するにあたって重要な切り口であるにも関わらず、これまで法學解釈やそれに関連した領域の考察に牽引され、見落とされがちであった。そこで本稿は、神道教育研究という領域から考察を進めることで法學論・国家論に向いていたベクトルを人間教育・人間修養の方向に修正し、寛の主張内容を抽出するように努めた。

その為、本稿は初期の『古神道大義』（清水書店 大正元

関連著作ではなく、円熟した思想が表現されていると評され、寛が神ながらの道を「人の心の道」「人の心を練る道」と説いた『神ながらの道』を中心に考察を進めた。寛によると「人の心の道」を実践するとは、限りある肉体に限りなき普遍的大生命を宿し、それを実現することであるという。そしてその任を果たせた者を、表現單純人・みこと・まろと呼び意義を認めていることから、普遍的大生命との取組方が要点であると考えられ、その取組方を考える上において『神ながらの道』は重要な示唆を与えているのである。

例えば普遍的大生命の位置に、天之御中主神という神が現れるわけだが、寛は『続古神道大義 上』で天之御中主神を「宇宙の中に行き亘つて居る所の神様」、人間から見ると「最も深い真面目」、すなわち「本来の姿」であると表現している⁽⁴⁾。しかし『神ながらの道』において天之御中主神は根源的な「万物を有らしめる神」と説かれ、その理解は深められているのである⁽⁵⁾。そして神ながらの道は、万物を有らしめる天之御中主神の理解を土台に、その力の作用として産靈神を説いたうえで、その發展史として成立する神々の物語、すなわち普遍的・根源的の發展史を鑑み生きたること、と表現されていくのである。これは『古神道大義』『続古神道大義』でも述べられている内容だが、

その表現方法は明らかに「人の心」の在り方に重きを置いた跡が確認できる。

こうした神ながらの道・神ながらの精神を養う為の手段が日本体操である。日本体操の各動作にその神道論が反映されており、例えば「立て」という動作は、物理的に直立するだけでなく神より与えられ、始祖以来相続されてきた各自の立場に立て、といった意味が込められ、「みたましずめ」は、神の生命—大生命—の中で生きる人間が、その現実集中し、自分の生命を拡張するといった意味が込められている。このように自身の述べる神道論が明確であり、かつそれを習得するための方法が残っていることから、寛の事例は神道教育史上、極めて貴重な事例であると考え、考察に至る次第である。

一 寛克彦に関する先行研究・文献史料

寛は明治から昭和にかけて活躍した法学者である。そして東京帝国大学で教鞭をとった経歴もあることから注目を浴び、現在に至るまで様々な評価を受けている。⁽⁶⁾そこで本項は先行研究・それに準じる文献を提示し全体像を俯瞰すること、次項で行う寛の人物像を説明するという作業の基礎作業を行いたい。

まず寛の人物伝として注目すべきが、実子寛泰彦^{寛泰彦}「父寛

克彦のことも」〔学士会会報〕六九〇 昭和五二〕である。寛の少年時代から晩年に至るまでのエピソードが散りばめられており、見る者に鮮烈な印象を与える内容となっている。これに加えて娘婿である三瀧信吾の「寛克彦方法と業績」〔神道宗教〕四一 昭和四〇〕、「古神道—神社神道と『信教の自由』—寛克彦博士の『皇学』提唱の意義」〔神道宗教〕一七七 平成一二〕を参照することで、近親者から見た人物像・思想を確認することができよう。

次に寛の経歴において特筆すべきは皇族との交流である。一九二四（大正一三）貞明皇后へ御進講を行ったが、その記録が『神ながらの道』・『大正の皇太后御歌謹釈—貞明皇后と神ながらの御信仰—』（寛克彦博士著作刊行会 昭和三二）に残されている。⁽⁷⁾貞明皇后への御進講は秩父宮雍仁に神典を御進講したことがきっかけと言われているが、この時の御進講に貞明皇后が感激し、国民にも読んでもらいたいと考え出版されたのが『神ながらの道』である。特に貞明皇后が養った絹を表紙に用い、全国の官国幣社に寄進されたことは見逃し難い。そのエピソードを左に挙げる。

そして二月二十六日を皮切りに六月末まで、精魂こめて十回にわたりご進講いたしました。国母として御病氣勝だった大正天皇の皇后として人生の表裏や苦悩を深くご体験になって、日夜ご修養をつまました貞明皇后

様の打てば響くようなご聴講振りに接し、ますます感
激し全力を尽くしてこれに当たりました。そして大森
皇后宮大夫を通じて、父のご進講に対して「神の人を
して言わしめたのではないかと申し召された」という
有難いおことばさえ賜わったのでした。皇后陛下はこ
の進講録を出版し、これを神に捧げ、また国民にも広
く読ませたいとの思し召しから、御自ら紅葉山御養蚕
所で養い給うた絹を用いて表装した本を全国の官国幣
社にご寄進になり、その思召を体して普及版を作り、
広く一般に頒つたのでした。⁽⁸⁾

さらに大正天皇と貞明皇后の第三子、つまり昭和天皇の
弟である高松宮宣仁との交流は『高松宮日記』（中央公論社
平成八）に残されており貴重な史料となっている。⁽⁹⁾さら
に満州国皇帝である愛新覚羅溥儀にも講義を行ったことも
特筆すべき事項である。⁽¹⁰⁾

また東京帝国大学の教え子・寛に師事した人物の回顧談
も貴重な記録である。教え子としては南原繁（丸山真男・
福田歓一編『聞き書 南原繁回顧録』東京大学出版会 平成元
をはじめ、安井英二（『安井英二先生談話』信学行社 昭和四
五）、賀屋興宣（『私の履歴書』昭和三八）の回顧談が残って
おり、寛の人物を窺い知る史料となっている。そして寛に
影響を受け自身の作品（『旅愁』）に古神道を信奉する人物

を登場させた横光利一、寛の提唱した日本体操を推進した
加藤完治（日本国民高等学校）や山崎延吉（神風義塾）も寛
の影響を探るには興味深い。

そのほか柳田國男「民俗学のはなし」『定本 柳田國男
集二四』（筑摩書房 昭和四五）、折口信夫「古代人の思考の
基礎」『折口信夫全集三』（中央公論社 昭和五〇）、丸山眞
男『丸山眞男座談 第六冊』（岩波書店 平成一〇）、小倉慈
司・山口輝臣『天皇と宗教』（講談社 平成二三）にも寛の
評が残されているほか、赤澤史朗『近代日本の思想動員と
宗教統制』（校倉書房 昭和六〇）、葦津珍彦『国家神道とは
何だったのか』（神社新報社 昭和六二）、阪本是丸『国家神
道形成過程の研究』（岩波書店 平成六）らの近代宗教史・
国家神道研究においても神社制度調査会関係の項などに寛
の名は記されている。

これに対して、寛を批判する向きの論考も挙げておく必
要がある。例えば竹田稔和は『ドグマティズム』と『私
見なし』—寛克彦の古神道について—（『岡山大学大学院文
化科学研究科紀要』一一 平成二三 頁二〇〇）において左の
ように記している。

柳田國男は『明治大正史 世相編』（昭和五年）の中で
「国の学問は独立した」と述べている。確かにこの頃
には「他の言語をもって人のすでに説いたことを通訳

するだけでは学問と認められなくなった」し、日本民俗学のように「日本の自然と社会とを、対象とする研究が盛んになってきた」。だが、この著書の後に陸続とでてきたのは所謂日本精神、日本主義ものであった。

それらは皆、記紀等の古典を根拠に日本の独自性^{II}至上性を主張しつつ、剽窃した諸々の西洋思想でその中身を埋めるといふ、日本以外には到底通用しえない「バルバライ」(戸坂潤)であった。小論ではその一例として東京帝大法科教授・寛克彦の古神道を取り上げる。寛は日本主義者の草分け的存在であり、したがってその古神道への批判は日本主義をトータルに批判するための試金石になる。むろん戸坂がいうように、「相手が非科学的な時、之を科学的に批判するほどムツかしいことはあるまい。」そこで小論は、寛の思想形成の過程に即することで、古神道発生の意味を探るところから始めたいと思う。

竹田は日本民俗学に続き出現した「日本精神、日本主義もの」を、日本の至上性を主張しつつ剽窃した西洋思想で中身を埋めたバルバライに他ならず、寛の古神道はその一例であると指摘する。バルバライ (βαρβαροι) とはバルバロス (βαρβαρος) の複数形で、英語の barbarian (野蛮人) の語源とされる語である。もともとバルバロスという語は、

聞きづらい言葉を話す者・訳の分からない言葉を話す者といった意味で用いられるも、後に野蛮人の意味も加えられた経緯を持つ。この語義を念頭に置き、竹田の論文を読み返すと尋常ならざる強烈な批判が加えられていることが理解できよう。竹田の認識によると寛の言説は訳のわからないものという結果に帰着してしまうからである。寛を批判的に評した短いものとしては中島健蔵『昭和時代』(岩波新書 昭和三三)、折原脩三『ひとつの親鸞』(研文出版 昭和五六)、戦前も岩野泡鳴による批評『寛博士の古神道大義』(名著評論社 大正四) による言説があるも、竹田の批判は組織立った批判として注意を払う必要がある。

また近年、河田和子『戦時下の文学と(日本的なもの)―横光利一と保田與重郎―』(花書院 平成二二) といった研究をはじめ、頼松瑞生「近代日本法思想に與えたる佛教の影響―寛克彦の『佛教哲理』を中心に―」(『法制史研究』四四 平成六)、高乗智之「帝国憲法下における教育権独立論―寛理論の分析―」(『柏樹論叢』日本文化大學 平成二二) といった各分野からの研究もあるが、ここでは名を挙げるにとどめ分析は他日に譲ることとする。

二 寛の人物像について

前項において先行研究を挙げたが、本項ではその内容吟

味を目的として、寛の人物像に焦点を絞り分析を加えてみたい。例えば寛克彦という人物はしばしば「神がかり」・「奇矯」・「奇怪」といった言葉で語られる。中島健蔵や立花隆は神がかりという語で、長尾龍一は奇矯、先述した竹田稔和は奇怪という語で寛を評しているが、まずは彼らのようにこうした言葉から考察を進めてみよう⁽¹¹⁾。

まず彼らは何をもって寛を「神がかり」・「奇矯」と評すかという点、それは研究室に神棚を祀り畳を敷く、教室で拍手を打ち「弥栄」を叫ぶといった言動にはじまり、さらには神ながらの道を主張し、日本体操を開発・推奨した経歴に依拠している。これらの内いずれをもつて「神がかり」・「奇矯」と言うかは個人差があるものの、これらの言葉に寛への批判が内在している事は言うまでもない事実である。その根底には伴悦が寛の主張を「偏狭的な国家主義」と理解したことを始め、多くの人間が寛を軍国主義・国家神道・天皇絶対主義といったキーワードと絡ませて理解しているように、戦前に神道を唱え影響力を持った人物であるから有無を言わず「神がかり」・「奇矯」と評を下す傾向が見える。

ではそうした言説が妥当かという答えは否であろう。阪本是丸の研究成果（『国家神道形成過程の研究』岩波書店平成六ほか）に見られるように戦前の神道が、村上重良が

『国家神道』（岩波書店 昭和四五）で主張したようなものではないという事実は、神道に親和的であるかはさておき、近代研究者である中島三千男をはじめ、文学の研究者である河田和子にもある程度共有されている事実である⁽¹²⁾。そもそも寛は戦前の神社行政からすると正統の存在であるとは言いがたい。神社非宗教という神社政策が進む中、神道を宗教であると断言し、神社非宗教を批判する寛を「戦前の神道」「国家主義」「軍国主義」として一括りにして語ることが果たして妥当であろうか。また戦前の神道の底流となっている神道思想も知らず批判を加える行為についても再考の余地があると思われる。

それとは別に確たる主義・主張・思想に基づき寛に非難を加える者もいようが、それはそれで一考の余地はあるにせよ、本稿はそうした巷間に流布する寛についての人物像から一旦距離を置き、史料に即した共通認識を確立する必要があると考える。以下、寛泰彦を始めとする評伝を繙きその目的を果たしたい。

まず寛について見逃すことが出来ないのが、日常から培われた穏やかな人格、すなわち人情に篤い面である。これは既に青年期における弟とのエピソードに如実に表れており、後年一人一人の生活に根差した神道を説こうとした姿勢を彷彿させるものがある。その他朝鮮総督府に招かれた

際、ここは帝国の一部であるから朝鮮服を着るのは、帝国の一方の服を着ることであるから何の問題があるのかと喝破したエピソード⁽¹⁴⁾、日本本来の道を忘れ歩みを進めていく日本に警鐘を鳴らしていたエピソード等も、そうした人間性の延長と考えられ、寛を論じるにあたり念頭に置く必要がある。寛を必要以上に美化することは避けねばならぬが、こうした性格がゆがめられ報道・流布されたこともあり、ここで特に強調しておきたい。

弟潔彦のエピソードだが、そもそも寛は四人兄弟の長男であり、うち二人は夭折していることから三男潔彦は寛に残された一人の兄弟であった。その潔彦も大学在学中に亡くなっているが、在りし日における兄との交流は寛の人物像を考えるに重要なものである。寛は東京帝国大学に在学中、本郷元町の寄宿舎長善館に寄宿していたが、寛の父が各地を転任していた為、弟を長善館で引き取ることになる。弟を引き取るといっても、潔彦はこの頃ようやく小学校に入学するような年齢である。親元を離れて寂しがる弟を可愛がり、夜中に一緒に便所に連れて行くという兄の行為、そして空腹を見かねた周囲の者がおやつを与えても、夕方帰ってくる兄と分けて食べることを常とした弟との間に流れる情は寛の人間性を察するに余りあるエピソードであろう。潔彦はその後、東京帝国大学の法科大学に進学し、兄

の最初の教え子になったというが在学中に病没してしまう。寛は終生潔彦の写真を目にふれやすい所に掲げ、兄弟愛を扱った小袖曾我のような謡をすると落涙が止まることになったという。

また次に指摘しておきたいのが戦前における寛のスタンスである。それを顕著に示すのが神社制度調査会における寛の言説であろう⁽¹⁵⁾。この会における寛の発言は、当時の公式見解である神社非宗教に恭順するものとはいえない。これに先立つ八神殿における祭神問題において神道のあるべき姿を開陳する様を見ても、寛が神祇行政と軌を一にしているとは言えないのではなからうか。こうした状況を端的に示す左のようなエピソードがある。

これより先、昭和四年から父は神社制度調査会の委員を仰せ付けられました。かねて古神道の思想に到達した時から、日本における神社のもつ深大な本質と意義に思い至りましたが、神社が純真な神への信仰を失って、形骸化し、神職の多くは祭りの型式のみを事とし、世間的名譽や称号に拘泥する政治の下に易々として利用されている現状を見て、何とかして神社および神職が神ながらの信仰に立脚した、本来の面目を自覚するようにと念願して止みませんでした。神社は、何と言っても真正な神への信仰に立脚するものであり、

またそうなくてはならぬと考えたので、父は真つ向から「神社は宗教」であることを力説しておりました。しかし、神の信仰なき人々は、神社を宗教とすること unnecessary に恐れ、ただ目先の勢力の保持や利害に拘泥していたようであります。日本の国を本当に立派な国となすためには、権力生活たる政治や法律制度といものが、どうしても正しい信仰と正しい哲理に基礎をすえたものでなくてはならぬとしーといつても、決して既成宗教を排斥するのではなく、だからこそかえつてそれらを喜び迎え入れそれによつて神ながらの信仰を發揚しなければならぬと考えていたのであります。――そうした正しい拘泥のない神ながらの神の信仰を發揚すべき国家の機関、天皇の神ながらの正信を輔翼する機関を設けなくてはならぬと考えたのであります。⁽¹⁶⁾ 寛のこうしたスタンスは時代が進んでも変わることはなかつた。

戦争の進行とともに軍の横行がはじまり、社会の風潮は極端に右翼化し、美濃部博士や津田左右吉博士の事件などがありました。父はこの時文部省教学局主催の講習会において「大日本帝国憲法の根本義」について講演しました。これは立法法すなわち神ながらの信仰にもとづく天皇および我が国の根本を説いたもので、

これにより形式的な権力主義の行き過ぎを寛らせようとしたものです。しかし、父の言説の真意はなかなかわからないで、そのうわべの部分の形式が皇国精神だとして誤解されたり、まげて利用されたりしたことが多かつたように思います。⁽¹⁷⁾

寛泰彦はこの他にも、寛が神宮爆撃について電話取材を受けた際「日本精神を真に理解しない神罰である」と答えた言が全く違ったニュアンスで新聞に掲載されたことを回顧しており、三濤もこれを証言しているように、寛の人物像における曲折は形・程度こそ違え、在世中にも存在する問題であつたことが窺える。⁽¹⁸⁾

また寛の人物を見るに欠かせないのが、教え子たちの回顧である。寛は東京帝国大学で教鞭をとつたわけだが、勿論その全員が寛に賛意を示したわけではない。冷やかかな視線を浴びせた者もいれば斜に構えた意見を述べる者もいたわけだが、その一方左のような回顧が述べられている。

もともと法学部は実証的・法解釈学的な講義が多いなかで、ほとんど唯一の哲学的な講義であつた。学界の反響も大きかつたし、学生にも人気があつた。また、先生は一高では工科であつた。だから製図の心得があるんだね。それで対立関係とか、融合関係とか、どんな図にして書いてゆく。先生の全盛時代ですよ。私

が卒業して数年後には、先生は神道へいつている。それから先生の学問は宗教と一緒に変わったような形で、教室でもうやうやしく拍手を打たれる、礼拝をされるという、われわれからみれば非常にドグマティズムになってしまわれるわけです。(中略) そんな関係で、私は在学中も、卒業して役人になってからも、また大学に帰ってからも、先生のところにはときどきお伺いして、親しく願っておりました。お互い、立場はまったく異なっておりますけれども、先生の立場を尊重して下さって、ずっとご交際いただいて参りました。たとえば先生の書齋には神棚があり、それを中心に世界のあらゆる神、あらゆる聖界の像が祭られている。訪問客は必ずそこに礼拝させられ、食事のときも神道式の礼をさせられる。しかし、先生は私には何一つ強制されなかった。先生は、私が一つの信仰としてキリスト教を信じ、哲学としてはドイツ理想主義哲学をもっていることをご存知で、それを求めて下さっていたのです。やっぱり人をみて対応されたのですね。それだけ広いところがおありだったのですよ。⁽²⁰⁾

これは一九四五(昭和二〇)二月より東京帝国大学の総長を務めた南原繁の言である。南原は生涯を通して熱心なキリスト教信者であり東京帝国大学入学後、内村鑑三の

弟子になっているが、こうした人物による評価は興味深い。さらに内務官僚・政治家として岡山県知事・大阪府知事・文部大臣(第一次近衛内閣)などを歴任した安井英二、大蔵官僚・政治家として法務大臣・大蔵大臣を歴任した賀屋宣も左のように述べている。

安井…だから私は縁を非常に大事にしました。人と人との縁です。仕事の上の縁でもこれを逃したらもうダメです。宗教家というものは縁を大切にする者だと思ふのです。私は宗教家ではないけれども、そういうことはどうも大学の講義ではむろん教わりません。けれども私のいうような説明ではなくして、寛先生の講義からはこういう消息を教えられました。勿論先生の講義はやっぱり系統的な知識として、学問をつくっていらっしゃるのですが、それだけではなくして、もっと広い深いあらゆる問題が含まれ提起されていますから、この大切な縁ということも考えられてくるのです。⁽²¹⁾

賀屋…大学で感銘をうけたのは寛克彦教授の法理学講義である。寛教授は教室でかしわ手を打ったりするので奇人扱いするものもあったが、私はこの教授のおかげで、はじめて国家とか社会とか人生というものを思想的に理解することができた。いや思想以上気持ちの

うえで、堅くいえば、全容もほかの教授のような平板なものではなくきわめて熱のこもった、スケールの大きい、深い、かつ組織的なものであった。学問の神髄にふれるようなものがあつた。私の人生に深く影響を与えた人は母と本永とそして寛先生の三人といつてもよいだろう。そのくらい私は寛先生を尊敬していた。永遠の師である。⁽²²⁾

さらに興味深いのがマルクス主義者である梅本克己と丸山眞男の対談にある梅本の言であらう。

その点でおもしろいのは北一輝と寛克彦ですね。天皇制の再編成は必要としても、資本主義体制の上からいえば北一輝では困る、だからはじき出される。ところが寛さんの方になると、その国体論は猛烈なもので、天皇制からいえば極右といつていいものだけれども、それが通用の国粹主義にむすびつくかという点、そうでもない。国体の中身は「空」みたいなもので、なんだか知らんけれども紙袋みたいなものの中から、ぴょこぴょこ親鸞がとび出したり、道元がとび出したり。ゲートのファウストまでとび出してくる。組織論的効果からいっても測定不可能だ(笑)。「一種の狂信者といつてもいいんだけれども、その狂信の内容が蓑田駒喜などと全くちがう。まったくうらうらとして、神

道自由主義みたいところがあつて、つかまえてこたない。宣長のある面をそのまま継承している。自然主義的ナシヨナリズムとでもいうか、簡単に国粹主義とは重ならない。反動思想の原動力になっていることはたしかなんだが⁽²³⁾。

寛は明治三十一年にヨーロッパ留学を命じられ、ドイツでキリスト教、ウィルヘルム・デイルタイと出会い帰国後、仏教・神道へと歩みを進める。本来この展開過程も論考を進めるに値するものだが、戦前における神道の平面的な指摘、「神がかり」・「奇矯」・「奇怪」といった寛に関する一面的な批評を鑑み、寛の人物像を提示することが先決であると考え、本項ではその点を強調し指摘した。

三 寛の神道論

I・特徴

寛の神道論だが、徹底した実践重視を特徴として挙げる事が出来る。『続古神道大義 下』(清水書店 大正四)、『風俗習慣と随神の實修』(清水書店 大正七)に見える生活に密着した神道への志向性は、当時の神道政策へのプロテスタントとしても興味深い、そうした中で構築され磨かれた寛の言説は、現代でいうなら経営者に向けての修養に

近いような内容が盛り込まれている。例えば寛は矛盾というものを、進展に不可欠なものとして把握しており、それは悪い物には違いないが決して決定的な悪、即ち避けて通るものとして捉えていない。本質的な要素「生命・いのち」が進展するにあたって、悪いことは善に転化するもの、さらには善の進展には必要不可欠な存在としても把握している。実践への志向性と一口に言っても、日本神話を事実として捉えるのかどうかといった問題をはじめ、現代社会においても数々のハードルが存在しているが、寛はそれらを「神ながらの道」という視点から解説し、さらにはそれを進むにあたっての心得を示している点、すなわち心のありかたに結び付け実践の在り方を示している点に特徴がある。

寛は『古神道大義』（清水書店 大正元）やその続編で「表現」「独立」という用語を用いて論を展開させているが、『神ながらの道』では平易な表現に落とし込まれている。これは寛泰彦が言うように、円熟した思想を示し、きわめて平易に神や人や道の真髓を説いたという表現が射ている。⁽²⁴⁾では実子が円熟の境地を著したと評する『神ながらの道』には如何なる言説が説かれているのか。

まず題名にもなっている「神ながらの道」について考察を加えるならば、まずこの「神ながらの道」が智識を得る

という行為で完結するものでない、と表現されていることを見逃してはならない。⁽²⁵⁾これは神典に見られる神名・語義・意味を学ぶことを軽視・排斥するのではなく、知識を得た上での行い、又は知識を得るといふ行為の質を問うといった意味である。実践を伴うという意味においては陽明学の知行合一を彷彿とさせるものがあるといえよう。よって寛が「神ながらの道」を「心を練る道」「人の心の道」と言い、道具を吟味するような智識、物理・化学・自然科学・技術に関する智識、通常いわれるような歴史智識とは一線を画すると表現するのは、実践を伴う傾向が強いからと考えられる。

さらに「神ながらの道」の理解を進める為に寛の思索へ歩みを進めるなら、「知る」と「行う」といふ行為の間における深い関係性に注意を払わねばならない。まず「知る」といふ行為において日常生活情報を例に挙げるならば、一度情報を知ってしまったら改めてそれを取得する必要はない。しかし「神ながらの道」は、毎日食物を摂取し新鮮な空気を吸うの必要のように、常々自ら同じようなことを考え、他人の考えを聞く必要があると寛は説くのである。⁽²⁶⁾一般的な観念からすると些か疑問を生じる箇所と思われるが、前段で指摘した「心を練る道」といふ言葉を思い出すならば何故同じことを考え、他人の教えを聞く必要が

あるのかという疑問に解答を得ることができる。

ただし、その解答を得る為には、この主張の根底に我々一人ひとり、善き美しき存在を榮えさせようとする力（弥栄）を持った存在であるという認識が存在していることを理解する必要がある。説明を加えるならば、いくら善き美しき存在を榮えさせようとしても、そこには必ず躓きが起こってしまう。しかしその躓きは人をマイナスの世界に引きずり込むことを宿命づけるものではない。なぜなら人には、そもそも善き美しい方向への潮流が存在し、人はその方向へ転化することができるのであるから、同じことを考え他人の教えを聞くことで向上・転化の質を向上させようという考えが横たわっているのである。

また他人の教えを聞くという行為が、人はみな同じ存在から派生したという考えに依拠し、自己の行為でありながら自己の行為で完結しないとされている点も見逃してはならない。⁽²⁷⁾ 通常、知識の授受における講話者と聴講者の関係は、話す者が聞く者に知識を一方向的に伝えるといったものである。しかし「神ながらの道」が、話す者は話すことによつて聞き、聞く者は聞くことによつて説く者を教えることになると言われているのは、同じ存在から派生したという理解と、派生した各存在は善き美しい方向への志向性を持っており、共に榮えるべきもの・繁栄を共有できる存在とい

う理解に依拠するものである。

このように「神ながらの道」について智識を得るということは、通常意味される判断材料収集といった作業にとどまらず、自分自身を見つめ直すという領域にまで踏み込んだものだということが分かる。このことから「心を練る道」、つまり「神ながらの道」を知るといふ行為を考えると、それは物理的に自分という存在の内部で行われるにも関わらず、自分を超えた存在とつながりを持つという結果を確認することができるのである。そしてその当然の帰結として発生する、実践という段階までも含めるものと理解することができよう。よつて寛が「神ながらの道」を、日本人であり日本人を超越しつつ有する心の道とも説いているのは、日本人として本質に触れることで日本人以外のものとのつながりを自覚できるという意味であり、「天地と一致した人間」「人間その儘の日本人として有する理想信仰」と寛が表現するのも、こうした特性に連なるものと理解できる。そしてこうした善き美しい方向への志向性、自己を超え他者とつながる認識の紐帯こそ、生命・天之御中主神についての理解なのである。

Ⅱ・天之御中主神の理解とその展開

先述した神ながらの道を具体的に示すのが、神典にある

物語である。「神ながらの道」では神代巻に従って詳細が説かれており、一つの理論体系が確立されている。本項ではその出発点たる天之御中主神、造化三神、それに続く神々を挙げ、神ながらの道を神典に即して考えた際の具体的事例を示し、日本体操につながる架け橋として指摘したい。

まず寛は天之御中主神を「全一の神」⁽²⁹⁾と位置付けているが、この言葉は『聖書』に見えるような有人格・全知全能の神とは内実が異なっていることに注意を払わねばならない。例えば『聖書』の神は「創世記」で天地を創造しアダムとイブに言葉をかけるといったように人格を持つ全知全能の存在であるが、天之御中主神は有人格・全知全能をその特性とする存在ではなく、世界全体の「働き」を示す神として位置づけられている。

では寛は天之御中主神をどう説明しているかという点、有限・無限を包蔵しておりながら尚、無限を性質としている神であると説くのである。⁽³⁰⁾ここでいう無限とは、一般的に有限の反意語として用いられる無限とは違った意味で用いられているが、私達は、寛の提示する土俵と力士の喩えによって、その内実を窺うことができる。それによると天之御中主神が「土俵」であり、土俵で取り組む力士が「有限」と「無限」だという。これに別の箇所における天之御

中主神とは「ただそこにお有りになるだけではない。有らしむるが故に有る」⁽³¹⁾存在であるという説明を加えることで、寛のいう「無限」とは、一般的な「有限」「無限」という概念自体を存在させる用語であることがわかる。これは『古神道大義』に見られる表現でもあるが、寛によると天之御中主神は物を存在させる神なのである。そして、土俵の喩えを借りるならこの世界は「万物を存在させよう」とする土俵（天之御中主神）の上で、有限と無限が取組むことで成立していることになる。ここで注目すべきは「存在させよう」、即ち「有らしむる」力という理解と同時に、万物には元来善き美しき力が備わっているという理解が存在することである。それゆえ有るといふ概念は存在のみならず、価値をも含む、つまり価値をも有らしむる言葉としてより深く提示されるのである。このように寛はこの世におきる事象を、善き美しき力を「存在させよう」とする力の潮流の中で、有限と無限が混ざり合った結果生ずるものと解しているわけで、寛が頻繁に用いる「弥栄」という語はこの本質ともいえる力を指しているのである。

次に寛は「無限」を宇麻志阿斯訶備比古遲神と天之常立神、「有限」を豊雲野神と国之常立神と説明しているが、ここで重要なのが高皇産靈神、神皇産靈神の存在である。この二柱の神が「働きかける作用」、「働きかけられる作

用」であるという理解が、無限と有限の理解を一層深くする。まとめると左のようになる。⁽³²⁾

無限 無限に進もうという要求 宇麻志阿斯訶備比

古遲神

無限に進ませようという要求 天之常立神

有限 有限に進む神 豊雲野神

有限に進ませようという神 国之常立神

このように天之御中主神から国之常立神まで、一つの世界の在り方が表明されており、これに続く神々は、そうした世界の在り方に立脚し左のような力・作用を持った神として説かれる。⁽³³⁾【左表中段】

表

神名	神の力・作用	「神ながらの道」を修める際の心象過程
宇比地邇神	矛盾反対の力・作用	平常忘れていた事柄・思想が襲い苦しむ
須比地邇神	用	余計な心配から転じ、それに打ち勝ち神を迎え宿らせようとする
角杵神	物をつくり活かす力・作用	
活杵神		
意富斗能地神	出来た物を广大豊富にする力・作用	四方が広々として天上にも広がる気になる
大斗乃辨神		

伊邪那岐神 伊邪那美神	互いに調和しつつ助け合いながら進む力・作用	追進の意気込みが満ち、物を少しも不愉快に思わず、懐かしく思い仕事をしたいようになる
湊母陀琉神 阿夜詞志古泥神	大きく変わった後、あらゆる方面が備わる力・作用	次第に明るくなるような気分

寛はこの右の神々を説くにあたつて価値の問題を重視して説明したと述べている。ここでいう価値とは有り難い・懐かしい・美しい・善いといった内容を指しているが、神代七代の神々はそうした方向で理解できると共に、寛がこののち展開する神ながらの道の説明において重要な役割を示している。例えば宇比地邇神・須比地邇神は矛盾反対の存在を示す神と示されているが、これはこの世というものが、苦のない楽園ではなく精神の上に矛盾反対があることを裏付けるものである。そこで神は人の精神に大きな矛盾を与え、そしてそれを転化（善化・美化）するように人をつくつたという。そして角杵神・活杵神から伊邪那岐神・伊邪那美神までの神々は、まさにそうした転化の過程を証明するものとして示されているのである。この過程は、鎮魂という実修における、人の心の流れとしても示されている。ここでいう鎮魂とは、理屈で神々を見るのではなく、神々の信仰を前提に健全な理屈を養う行為であり、自分の

精神を統一集中し偶然を超越し無限の大なる根本（神様）に合一しようという試みである。即ち「神ながらの道」を修めるための心象過程であると言い表すことができよう。⁽³⁴⁾

【右表下段】

そして伊邪那岐神・伊邪那美神を始めとする神話に従い、寛はその意義を明らかにしていくわけだが、本稿は紙幅の関係上、以降の考察を他日に譲る。

四 日本体操について

日本体操（皇国運動）は、「神随らの精神」を養うことを目的とした体操である。

「皇国精神即ち皇国の根底万邦の精華たる神随らの精神」を養ふことを特殊の簡単たる体操として行ふものが日本体操（又皇国運動と書く）である。「やまとはたらき」とは皇国精神を振り起す動作の義にして、即ち心身を清むる禊祓の動作である。⁽³⁵⁾

寛はこの日本体操を禊祓の動作として、直後に神拝を行うことを薦めているが、祭典における修祓を否定する意図はなく、あくまで神ながらの精神を徹底するための手段として位置づけている。⁽³⁶⁾ 国内では昭和七年に設立された岩手県立六原青年道場、昭和一三年に設立された加藤完治の満蒙开拓青少年義勇軍内原訓練所、山崎延吉の神風義塾など

で実施、国外でも朝鮮総督府をはじめ各地で実施され、寛は敗戦後も改良を加え、晩年まで自宅で行っていた。⁽³⁷⁾

内容だが一六のブロックにそれぞれ運動を配置しており

「一一 ひと笑い」以降は、指導者が『古事記』『日本書紀』など神道古典を唱え、全員がそれを復唱する形をとる。正式に行うと一〇分程度、略式で六分程度であり各動作に、それぞれに寛の説く神ながらの道を修める為の意味がある。その全容を左に示す。⁽³⁸⁾

- 一 立て
(軽きおじぎ、間隔をとる)
- 二 みたましづめ
(概ね十五秒より二十秒)
- 三 をろがめ
(一拝)
- 四 抛げ棄て
(左右各一回) (注意 一回とあるは凡て十六挙動なり)
- 五 吹き棄て
(ア・ウ・オ三段の深呼吸)
- 六 いざ進め
(三回)
- 七 いざ漕げ
(左右各一回)
- 八 参る上れ
(一回)
- 九 気吹き
(ア・ウ・オ三段の深呼吸)
- 十 神楽び
一 小竹葉 (を三段にふるふ) 手を三段に動かす
二 眞さき (を三段にふるふ) 頭を三段に動かす (前・横・上各一回)

後・横・斜各一回)

三 日かげ(を三段にふるふ) 体を三段に動かす(前

後・横・斜各一回)

四 五百津真栄木(生ひ茂る) 肱を二段に動かす

(前・後各一回)

十一 ひと笑ひ (複唱) かれ、高天原動りて、八百万神

共に笑ひき)

十二 出まし (複唱) かれ、天照大御神出でませる時

に、高天原も、葦原の中つ国も、
自ら照り明るりき)

十三 天晴れ、おけ 二拝二拍手

(複唱又は同唱) 天晴れ、あな面白、あな手伸

あな明けおけ)

二拍手一拝

十四 みことのり (単唱) 天照大御神詔り給はく 葦原千

五百秋之瑞穂国は、これ吾子孫

の王たる可き地なり、爾皇孫就

でまして治ろしめしたまへ、さ

きくまします、宝祚の隆えまさ

んことは、天壤のむた無窮なる

べきもので、と詔り給ひき)

(単唱) 吾は則ち天津神籬及天津磐境を

樹起て、吾孫の為に齋ひまつら

む、汝天兒屋命太玉命は天津神

籬を持ちて、葦原中国に降りて、

亦吾孫の為に齋ひまつれと詔

り給ひき)

十五 あまくたり

(複唱)

爾、天津日子番能邇邇藝命に詔

りごちて、天の石位を離れ、天

の八重棚引雲を押し分けて、稜

威の道別きて、天の浮端に浮洲

(複唱)

在、久士布流峰に天降りましき)

於是詔り給はく、「此地は、朝日

の直刺す国、夕日の日照る国な

り、故此地ぞ、甚吉き地面」と

詔り給ひて、底つ石根に宮柱太

知り、高天原に冰椽高知りて坐

しまし

二拝二拍手

(単唱) 天皇陛下)

(複唱) 弥栄 弥栄 弥栄)

二拍手一拝(終わつて軽きおじぎ)

※単唱一人、数人が唱える 複

唱一人の後皆で唱える

この各種動作には深い意味が込められているわけだが、この日本体操は左のように大きく三つに分けることができる。

第一部（一〜五） 宇宙の大生命を全一として深く観る（宇宙大生命の深き直観）

第二部（六〜一五） 宇宙自身の内面より其の生命秩序（本末）の看破

第三部（一六） 体操の結び—人界—⁽³⁹⁾

前項で触れた天之御中主神・伊邪那岐神・伊邪那美神の内容に対応するのは、第一部の一〜二であるからそれに順じて寛の主張を見てみよう。まず「一 立て」だが、これは単なる直立不動の姿勢を要請するものではない。直立すること、最も自然なる各自の立処（立場）に立ち、それが神より与へられたるもの、即ち始祖以来相続し来りしものであることを自覚するよう求められているのである。寛はこれを「神ながら」⁽⁴⁰⁾「神ながらの立処」といい、左のような説明を加えている。

一 神がらの己が立処に立ちてこそ己も人も知るべかりけれ

二 神がらの己が立処に立ちてこそ天地なべて知るべかりけれ

三 神がらの己が立処に立ちてこそ此の天地も挙ぐべ

かりけれ

四 神がらの己が立処に立ちてこそ天地のむた弥栄えゆけ

神の表現者として即ち神たるは己の立場に立つに依る

次に「二 みたましずめ」だが、これは前項で述べた鎮魂と同義である。これによって寛は、宇宙永遠の大生命に己の生命を拡張することができ、各自が即宇宙其のものという自覚を以て益々宇宙の生命を実現することに役立たんとする修養動作が始まると説く。つまり天之御中主神をはじめとする神々によって織り成される「神ながらの道」の内容を動作によって示し、発現しようとしているのである。ここまでが前項で述べた伊邪那岐神・伊邪那美神までの内容を自覚する段階になるのである。そして「三 をろがめ」以下は、神代の物語に従って体操が配当され、神ながらの道を体を通して理解・体現・修養することができるのである。

こうした寛克彦の日本体操は清水康幸による皇国民錬成の研究、佐々木浩雄による集団体操の研究の他、実践された山崎延吉の神風義塾についての記述（網沢満昭『日本の農本主義』紀伊國屋書店 昭和四六）などで研究・紹介されている。⁽⁴¹⁾

おわりに

寛の神道論は人の心・行いに注力したものであるにも関わらず、これまでは法学・国家論といった分野からの考察が顕著であった為、その意義は必ずしも明らかにされていなかった傾向がある。本稿はその意義を明らかにする為、また神道教育研究の事例説明の為に考察を進めた。

その際、先行研究をはじめ巷間に流布する人物評と、文献史料から読み取れる情報に著しい温度差が確認できることから、本稿はその対策を講じることを優先課題とし、寛の神道論をはじめ諸考察における記述を大幅に削除した。寛の神道論には弥栄・三種の世界・三代一人といった、神ながらの道を実際生活上に活かす上で重要なポイントとなる概念が多数存在するが、本稿は右記の理由からその基本的概念の明示と、その反映たる日本体操との関係に触れるにとどめた。

寛の事例は神道を素材にしているものの、心の在り方という普遍的問題にアプローチしている。時代・地域的制約があるにせよ、それは決して生き方を考える教えとしてその価値を減じるものではない。寛の纏うフロックコートは自分の信じる道を歩む決意の現れであったというが、その奥に湧き出で揺蕩う神ながらの精神は、神道教育に限らず

現代に欠くべからざるものではなからうか。詳細なる論考は他日に譲ることを約して筆を措きたい。

註

- (1) ここで挙げた寛の書籍の出版社・出版年は左の通りである。『法理戯論』(有斐閣 明治四四)、『国家之研究』(清水書店 大正二)、『大日本帝国憲法の根本義』(岩波書店 昭和一一)、『神ながらの道 改定二刷』(岩波書店 昭和一一四)。なお『神ながらの道』は大正一四年に皇居後宮職から、大正一五年には皇学会から出版されているが、本稿では改訂二刷の『神ながらの道』を用いる。ここで挙げた書籍は寛克彦『古神道大義』(清水書店 大正元年)。引用箇所のうち前者は頁一六六、後者は頁二二三。
- (2) 『神ながらの道』(前掲 頁一〜四)
- (3) 寛克彦『続古神道大義 上』(清水書店 大正六 訂正第三版 頁五一)にある記述。また『神ながらの道』(前掲 頁三八)ではこの理解を、神道という一分野に限定されるものではなく、禅宗における「到處」「隨處」といった悟りの極致や真言宗における「即身成仏」と同じ境地であると表現している。
- (4) 『神ながらの道』(前掲 頁四二)
- (5) まとまった研究という縛りがなければ、寛は各方面でその名が挙がっている。東京帝大時代の寛を挙げたものとしては千朶木仙史『学界文壇時代之新人』(天地堂 明治四一頁一九〜二八)、松本重治『上海時代』(中央

公論社 昭和四九 頁五)、谷沢永一「探照燈Ⅱ机の塵」
〔国文学解釈と観賞〕ぎょうせい 平成一一年二月 頁
一八六)の他多数存在する。その他、記紀観に関連して
寛を挙げた守屋茂『日本社会福祉思想史の研究』(同朋
舎 昭和六〇 頁二五)など多岐に及んでいる。

(7) 『大正の皇太后御歌謹釈—貞明皇后と神ながらの御信仰
—』(寛克彦博士著作刊行会 昭和三六)には左のよう
なエピソードが残されている。入手困難であることから、
ここにその様子を窺える箇所を引用紹介する。「皇后様
には仏教の御信仰篤く仏教を平天下護国の教と御考へい
らせられた。皇后様は又常に御謙遜にて、何事によらず
教を乞ふと仰せられました。諸事共に寛に対して御教
を垂れ給ふと共に又試験遊ばさるのであつた。寛はた
だハイハイと御命のままに信ずる所、思ふ件を直接法
に事柄次第或は口上にて或は筆記して御答へ申し上げた
に過ぎぬ」(頁三二七)「自殺といふことに就ての御下問
大正十三年初夏 神道ニテハ講義ノ節自ら死スコト
ハ「三二ケタ」ノ人ヲ殺スト同ジナリト説カレタリ基教
ニテモ自殺ハ最モ罪深キモノトサレラル由聞居ルモ仏教
ニテハ如何ナリヤ 仏教ニハ苦ヲ脱スルコトアル様ナレ
ドモ弥栄ノ如ク苦ニ苦ヲ積ムト云フコトアリヤ」(頁三
六九)

(8) 寛泰彦「父寛克彦のことども」〔『学士会会報』六九〇
昭和五二 頁四七)

(9) 例えば『高松宮日記 二卷』(中央公論社 平成七 頁
三五三〜三五四)には左のような記録が残されている。
「昭和十年十二月十日 寛博士と語る。(一) 帝大。それ

も東京帝大は教学の中心である。こゝに皇学神ながらの
教を講座として(学部となれば猶よし)おくことが最も
よし。(二)国学院等は私学であつて党をなし利をねらひ
とても学生にしても熱がない。(三)学生にして帝大は
なんと云つても熱あり、之に点火すれば期せずして全国
の学に火をつけ学をおこすことが出来る。(四)皇族が
この信仰の問題、精神的の問題について会議をすること
が急務なり。そしてそれを助けるものとして神祇官が必
要になる。(五)現在の傾向は最も神ながらの教をおこ
すに適した機なり。(以下略)」

(10) 研究論文ではないが入江曜子が著書『貴妃は毒殺された
か 皇帝溥儀と関東軍参謀吉岡の謎』(新潮社 平成一
〇 頁一四二〜一四三)で、その際の進講内容を紹介し
ている。

(11) 中島健蔵の言説は『昭和時代(一一刷)』(岩波書店 昭
和四二年 頁一一一)。中島は昭和一〇年に行われた教
学刷新評議会の委員について寛を「札つきの神がかりの
学者」と評している。立花隆は「寛博士」と「神ながらの
道」(『文藝春秋』八一—二 文藝春秋 平成一五)で
寛を「神がかり状態にある人」「相当エキセントリック
な人」と表現し、長尾龍一は『日本史大事典』第二卷
(平凡社 平成五年 頁一五)の「寛克彦」の項で「古
神道に基づく神ながらの道の道に帰依、教室でかしわ手
をうつなど奇矯な言動で知られた」と評している。竹田
稔和は「寛克彦の国家論—構造と特質—」(『岡山大学大
学院文化科学研究科紀要』一〇 平成二二 頁三四二)
で「寛の古神道に纏わる言説や日本体操(寛考案の神道

体操)等奇怪な行動のみが焼き付いているのではないだろうか」と述べている。

- (12) 伴悦「解説・解題」(『岩野泡鳴全集』第九巻 臨川書店 平成七 頁四八七)
- (13) 中島三千男についてはシンポジウム「国家神道とはなにか」(『正論』三〇七 平成一〇年三月号 頁二八六)が典拠。河田和子も『戦時下の文学と(日本的なもの)』—横光利一と保田與重郎—(花書院 平成二二)において神社制度において一定の理解を示している。
- (14) 「父寛克彦のことども」(前掲 頁四六)
- (15) 神社制度調査会議事録は神社本廳編「神社制度調査会議事録」(神社本廳 平成一一)で確認できる。
- (16) 「父寛克彦のことども」(前掲 頁四八〜四九)
- (17) 「父寛克彦のことども」(前掲 頁四九)
- (18) 「父寛克彦のことども」(前掲 頁四九)と三瀧信吾「古神道—神社神道と『宗教の自由』—寛克彦博士の『皇学』提唱の意義—」(『神道宗教』一七七 平成二二 頁一五)來問恭「寛博士と上杉博士」(『解放』四一五 解放社 大正一一)
- (20) 丸山真男・福田歓一編『聞き書 南原繁回顧録』(東京 大学出版会 平成元 頁一三〜一四)
- (21) 『安井英二先生談話』(信学行社 昭和四五 頁二七)
- (22) 賀屋興宣『私の履歴書』(昭和三八 頁一一〜一二)
- (23) 「日本の反動思想」(丸山真男「丸山真男座談 第六冊」岩波書店 平成一〇 頁四九)
- (24) 寛泰彦「父寛克彦のことども」(前掲 頁四七)
- (25) 「神ながらの道」(前掲 頁一一)
- (26) 「神ながらの道」(前掲 頁二)
- (27) 「神ながらの道」(前掲 頁二)
- (28) 「神ながらの道」(前掲 頁三)
- (29) 「神ながらの道」(前掲 頁三四)
- (30) 「神ながらの道」(前掲 頁三四〜三五)
- (31) 「神ながらの道」(前掲 頁四二)
- (32) 「神ながらの道」(前掲 頁五五〜五九)
- (33) 「神ながらの道」(前掲 頁六〇〜六九)
- (34) 「神ながらの道」(前掲 頁七二〜七四)
- (35) 寛克彦「日本体操」(春陽堂書店 昭和四 頁一)
- (36) 「日本体操」(前掲 頁九)
- (37) 「父寛克彦のことども」(前掲 頁五一)
- (38) 寛克彦「神あそびやまとはたらき」(蘆田書店 大正一一)や「日本体操」(前掲)を参考にして作成した。
- (39) 「日本体操」(前掲 頁一五三〜一七一)
- (40) 「日本体操」(前掲 頁一五三〜一五四)
- (41) 清水康幸は頁二八寺崎昌男・戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育 皇国民「錬成」の理念と実践』(東京 大学出版会 昭和六二)。佐々木浩雄は「第二章 量産される集団体操—国民精神総動員と集団体操の国家的イデオロギ化」(坂上康博・高岡裕之編著『幻の東京オリンピックとその時代』青弓社 平成二二)。

※敬称略。旧仮名・旧字は必要に応じ改めた。引用中の太字・傍線部は筆者による。

(国立広島商船高等専門学校 流通情報工学科 非常勤講師)